FOCUS

存続へ 地域との絆より強く

女子ラグビー 横浜TKM

医療法人運営から転換 ファンや支援の輪広げる

女子ラグビーチーム「横浜TKM」は東日本大震災が起きた2011年、横浜市の医療法人グループが立ち上げた。今年、チームの運営体制を転換する。コロナ流行下で病院経営が苦しいなか、チームをいかに持続させるか。チームの代表で、医療法人・横浜未来ヘルスケアシステムの横川秀男理事長(64)に聞いた。

埼玉・熊谷ラグビー場で7日に行われた15人制女子の関東ラグビー大会決勝。東京山九フェニックスとの合同チームで臨んだTKMは20－25でアルカス熊谷と自衛隊体育学校の合同チームに敗れた。ラグビー経験のある横川氏は終盤に猛追した選手たちの姿を目に焼き付けた。

「最後まであきらめなかった。猛練習しているから、こういう試合ができるんだと思う」

この夏で結成10年。15年に亡くなった元慶大ラグビー部監督の上田昭夫氏が創設期、ゼネラルマネジャー兼監督を務めた。15人制W杯の日本代表や東京五輪の7人制代表候補にも選手を送り出す存在になった。

「大震災の年だったから、少しでも社会の力になれればと。元々は、ラグビーと医療の精神が一緒という発想から。みんなで体を張り合ってゴールを目指す。最高の医療を目指す過程も同じです」

日本ラグビー協会によると、女子の登録は11年度末の32チーム、2446人から19年度末には72チーム、5082人に。ラグビー全体の競技人口が減るなかで、大きく増えている。

「最初はうちで働いている選手だけでしたけど、今は学生やほかの仕事をしている選手も受け入れるクラブにしました。ラグビーをやりたくても場所がない、という選手がいますから」

病院経営はひっぱくしている。スポーツは不要不急とも言われる。「コロナ下で今まで以上にコストはかかるし、赤字の病院も多い。そんななかでどうこのチームを継続させるのかを考えた」。昨春からチームを運営する一般社団法人を立ち上げ、女子ラグビーの活動を通して、地域社会と結びつく理念をより鮮明にした。

「会社や個人のスポンサーは増え、横浜市もふるさと納税制度を活用して支援してくれる。ファンクラブも作った」

「今日の試合もハイライトシーンを支援してくれる方に送る。選手たちの頑張りを、活力にしてほしい」

努力のかいあって、ファンクラブ会員は175人、協賛社は34に（2月初旬時点）。チームの運営予算も切り詰めた。

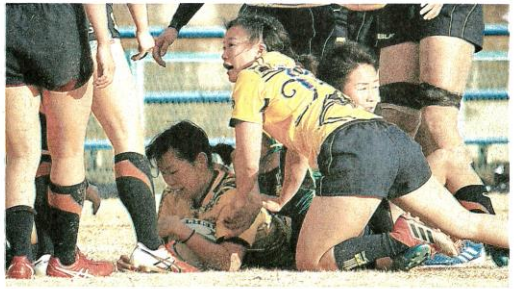
五輪には今逆風が吹き荒れる。「目標があると、選手たちはそこに向かえる。無観客かもしれないけど、開催してほしい。やってほしいと思っています」

この試合限りで引退した元日本代表FWの三村亜生(31)はバスケットボールを大学まで16年やった後、TKMでラグビーに9年間取り組んで15人制W杯にも出場した。横川氏は、そんな選手たちのセカンドキャリアも考える。

「選手の多くは事務職ですが、引退後に看護学校にいきたいと思っている選手はいるので支援したい。三村さんは介護福祉士の資格をとった。ラグビーや仕事をしながら、勉強できる環境を整えたい」

（野村周平）

横浜TKMの選手たちと横川秀男代表（前列中央）



関東大会決勝でトライを決める横浜TKMのロック三村（中央下）